

アタナシオスとクリュソストモス

—コンスタンティノーブル教会の二人の改革者を比較する—

橋川裕之

本報告の主題は、古代および中世のコンスタンティノーブル教会の改革者的指導者として記憶されている二人の人物を比較し、ビザンツ世界における教会改革の系譜を探索することである。比較される二人の人物は、パレオロゴス朝初期に総主教を二度務めたアタナシオス（在位 1289-93 年、1303-9 年）と、古代末期の著名なギリシャ教父であるヨアネス・クリュソストモス（在位 398-404 年）である。ギリシャ共和国を含め、今日のキリスト教世界において両者の知名度には決定的な相違がある。アタナシオスは正教聖人の一人として今日の正教会において毎年記念されているが、聖アタナシオスと聞いて、コンスタンティノーブル総主教のアタナシオスを想起する人は稀であろう。また、アタナシオスが残した書簡を中心とするテキストは、専門家以外にはほとんど読者を持たないであろう。一方、クリュソストモスは正教会のみならず、ローマ・カトリック教会においても記念されている聖人であり、彼がギリシャ語で記した膨大な量のテキストは数多の言語に翻訳され、今日まで参照され続けている。

このようにアタナシオスとクリュソストモスの間には、知名度の点でも後代への影響という点でも大きな相違があるわけであるが、両者の比較は、クリュソストモスの政治がビザンツ世界に及ぼした影響の一面を明らかにする可能性を秘めている。なぜなら、アタナシオスはクリュソストモスの伝統に立脚する形で、教会と社会の改革を志向した痕跡があるからである。本報告で注目したのは、アタナシオスの最初の総主教在位と 1293 年の失脚である。アタナシオスが総主教に就任した直後から、従来の総主教には見られなかったような改革を試みたことは、同時代人の証言もあり、歴史的な事実とみなせるが、彼が当初からクリュソストモスを自らの行動モデルとしていたかどうかは定かではない。アタナシオスが少なくともある時点でクリュソストモスを意識していたことを示唆するのは、彼が 1293 年に総主教座を去る直前に執筆した書簡である。この書簡の中で、彼はクリュソストモスの名に言及することなく、クリュソストモスの著名な言葉、「彼自身を苦しめない人を、何人も苦しめることはできない」を引用している。また、アタナシオスは 1297 年に皇帝アンドロニコスに送った書簡の中で、自らが「世を照らす人」クリュソストモスのように、敵対勢力の策謀によって教会を追われたことを示唆している。

このようにアタナシオスが最初の辞任に際して、クリュソストモスの経験を想起したことが確実であるとするれば、両者の経験の類似あるいはアタナシオスによるクリュソストモスの想起はどのような意味を持ったのであろうか。両者の比較はこの問題を考えるための有効な方途となりうる。両者に共通するのは、コンスタンティノーブルの主教ないし総主教としてラディカルな性質の改革を試みたこと、そして敵対勢力の策謀によって失脚を余儀なくされたことである。本報告では、両者の登場から失脚に至るまでの政治的経緯と改革の内容を比較した上で、両者の失脚に対する認識の相違が決定的に重要であると指摘した。クリュソストモスはコンスタンティノーブルから小アジアの奥地へと追放された後、

貴族女性オリュンピアスを含む支持者たちを激励することを目的として、敵対者からの迫害は真の苦難とはなりえないという趣旨のテキストを書いた。一方、アタナシオスは自らの苦難よりもはるかに重大な問題が生じたと書簡に記している。すなわちそれは、聖職者による教会そのものへの迫害である。彼の見解では、総主教への敵対行為は、教会そのものへの迫害と同義であった。したがって、もはや総主教ではなかったにもかかわらず、彼は、迫害を受け、転覆した教会にしかるべき正義と秩序を取り戻すことが必要であると考えたのである。クリュソストモスからの飛躍として特徴づけることができるアタナシオスのこの認識は、トルコ人勢力の台頭にともなう小アジア社会の危機とあいまって、1303年から始まる彼の二度目の総主教政治に、よりラディカルかつ切迫した性質を付与することになった。